



特集

ラオス

母子保健プロジェクトの現在地

News Letter

2022年
7月30日発行

第42号

ラオス事務所のプロジェクト 上半期を終えて

ISAPH ラオス事務所は、農村部のカムアン県サイブートン郡内の13村を対象に3年間のプロジェクトを実施しています。2022年3月にプロジェクトの折返しを迎えたため、上半期の各活動の成果をお知らせします。

本プロジェクトはラオス事務所の日本人スタッフを一新し、新体制のもとでスタートを迎えました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大による混乱を受け、開始当初は入国許可が下りず、現地スタッフやカウンターパートとオンラインで連絡を取り合うことになり、また、入国後も往来規制（ロックダウン）が度々施行されるなど、トラブル続きのなか活動を進めた上半期となりました。

2022年6月にはプロジェクトの関係者とともにMOU中間活動報告会を実施しました。地元メディアによる取材やラオス外務省職員が片道約10時間かけて出席するなど、私たちのプロジェクトがラオス国内で高い関心を得ていると実感しつつ開催を迎えました。各関係者からは、コロナ禍でも活動を実施できたことに対して高い評価を得ることが出来ました。カウンターパートである県保健局長は、「住民が継続して保健サー

ビスを受療していくためには、ISAPHや保健セクターの力だけではなく、村長を始め女性同盟や村落保健ボランティアなどが協働して地域課題に向き合い、実施していくことが必要である」と、一丸となって実施していく重要性を述べました。下半期は、現在の活動を引き続き実施していくことに加え、現地から高い要望のあった日本とラオスの対面による国際交流（日本人学生のスタディツアー等）を再開することを伝え、報告会を締めくくりました。



MOU中間活動報告会

妊娠・分娩に対する伝統的な 価値観の変容を目指して

～地域母子保健事業～

ISAPH ラオス 安東 久雄



プロジェクトの半分が過ぎ、乳児死亡件数は減少、母子保健サービス利用率は上昇という一定の成果を挙げました。しかし、未だに3割はハイリスクな自宅分娩を選択しています。

残された課題に取り組む為、活動から得られた知見を報告します。初めに、妊婦と家族からの聞き取り調査の結果、自宅分娩で成功体験を持つ経産婦は分娩のリスクを過小評価し、再び自宅分娩を選択する可能性が極めて高いことがわかりました。一方、初産婦は病院で出産したいと思っても、祖父母が自宅分娩を強いるケースが浮き彫りになりました。彼らは難産になったら病院に向かえば良いと考えているようです。次に、出産事例を客観的に分析したところ、郡病院で

超音波エコーを伴う妊婦健診を受療し、正確な出産予定日を把握していたのはごく少数でした。大多数の妊婦は保健センター等で子宮底長によって予定日が推計されていましたが、出産日は予定日より平均で5週間早まっていました。予定日の間近で陣痛を迎えた妊婦は9割以上が病院で出産しましたが、予定日から逸脱して陣痛が始まった場合は5割近くの妊婦が自宅で出産しました。妊婦が郡病院でエコーを伴う妊婦健診を受療し、正確な出産予定日を把握することで、自宅分娩を減らせる可能性があるという示唆が得ら



産後健診の家庭訪問

れました。

残りの期間は、行動科学を利用して郡病院で妊婦健診や出産をしたいという気持ちを引き出す予定です。エコーを伴う妊婦健診を受療した妊婦はその様子をSNSに投稿して、未受療の妊婦の気持ちを刺激する

コミュニティ開発における 地域住民を主体とした 継続性の仕組みづくりと課題

ISAPH ラオス 石塚 貴章



コミュニティ開発活動の食用昆虫養殖技術普及活動とリボルビングファンド活動をそれぞれ報告します。

まず、食用昆虫養殖技術普及活動はNPO 法人食用昆虫科学研究会とともに、100世帯へ支援することを目指しています。より多くの住民に支援が行き渡るためには、ISAPHが直接支援するだけでなく、住民が教え合う仕組みを整えることが必要です。私たちは上半期において、地域の養殖技術指導者を育成するために16世帯の住民へ育成を開始しました。また、養殖の種苗機能を地域へ一部移管するために、住民自身が次世代、次々世代を自ら継続して生産できるように技術支援をし、習得することが出来ました。新型コロナウイルスによる行動規制により支援が度々途絶えることもありましたが、一世帯も辞めることなく継続できたことに現地のニーズを実感しています。モチベーションを維持できた理由のなかで印象的であったのは「子どもが美味しく食べるから」というものです。子どもの笑顔が住民の活動継続に繋がると気づきがありました。



蛹の生産に初めて成功して大喜びのパイロット農家

ことや、妊婦とその家族に自宅分娩中に突然出血が止まらなくなり母子が亡くなった事例動画を見せることで、予防的に病院で出産しようという動機と行動を引き出そうと考えています。

続いてリボルビングファンド活動は、前プロジェクトで本活動を運営する家族開発基金委員会の運用方法、体制を整備し終えているため、今回はISAPHの支援なしで自立して運営できることを目標としています。活動の持続性の課題のひとつに、「委員の交代」があります。委員は、実質的にボランティアにより運営されています。そのため家庭や仕事の都合で長く続けることは困難であり、定期的なメンバーの交代が必要となります。現委員による後任探しにより、2名の引受人が見つかり、業務の引継ぎを開始しました。立ち上げ時のメンバーはISAPHの後押しもあり、高い志を持って運営してきましたが、新たな委員にはまだ浸透していません。ましてや「やらされ感」があるのはなりません。まずは、この活動の意義を新たな委員にどう伝えられるかが、今後のポイントになります。



パイロット農家で幼虫の生産数や生産方法を確認する石塚職員



新しい家族開発基金委員に業務を引継ぎ中



マラウイからの報告

16年の変化から思う、マラウイの今とこれから

ISAPH事務局 山本 作真



アフリカの農業国マラウイと聞くと、どんな姿を思い浮かべるでしょう。昔ながらの暮らしを続ける農村という印象でしょうか。私は2006年に青年海外協力隊（現・JICA海外協力隊）で赴任以来、既に16年分マラウイを見てきました。長いスパンで振り返ると、意外なほど変化があります。

2022年6月、短期間ですが昨年末以来でマラウイを訪れました。わずか半年でも国内情勢は変化します。ロシア軍のウクライナ侵攻により、化石燃料や、世界的な不作と重なった小麦や食用油の大幅な値上げ。マラウイの通貨クワチャの切り下げも同時にあり、インフレが進行中です。現在、コーラ1瓶は350マラウイクワチャ。2006年には30～35クワチャだったので、16年で10倍強のインフレとなります。通貨安に伴い、この十数年で多くの人々が、経済大国である南アフリカに出稼ぎに行くようになりました。村によっては、出稼ぎで労働世代の男性がほとんどいない集落もあります。この流れで、国外から中古車やTVといった物資が大量に入ってきました。以前は考えられませんでした。今では首都など都市部は交通渋滞が深刻化しています。また、電気水道ガスといったインフラが全くない農村部では、ほとんどの世帯が大なり小なり

りソーラーパネルを設置するようになり、TVと衛星アンテナを所有している家庭もあります。村でもスマートフォンの世帯普及率は50%を超えています。出稼ぎ先の家族との連絡手段として普及したそうです。更に、モバイルの通信料金は2022年6月時点で50GBあたり約1,300円と、日本より安価な水準にあります。

こうした変化は、交通渋滞や電力不足といった新たな社会問題を生むと同時に、農村の暮らし、ひいては行政、教育、保健など多岐にわたって革新をもたらす可能性を秘めています。ISAPHは、活動地域への理解を深めながら、こうした変化を捉えて活動に活かされればと思います。



近年急激に深刻化してきた首都リロングウェの渋滞



送電はないが、ソーラーパネルと衛星放送のアンテナを持つ農村の住居

『現地語 ver』レシピ動画が完成しました

ISAPHマラウイ 浜中 咲子



昨年10月にマラウイの農村部で撮影したISAPHマラウイ事務所のレシピ動画がついに完成しました。レシピ名を英語から現地のトゥンブカ語の名前に現地スタッフに名付けてもらいました。また、以前は英語字幕のみでしたが、今回から字幕、ナレーションも全て現地スタッフ監修・録音の元、現地語に変更しました。全て現地語の動画ですが、マラウイの農村部の調理器具や風景など違う視点で楽しんでもいただけたらと思います。今後、ISAPHのYou Tubeチャンネルで公開し

ますので、是非みていただけると嬉しいです。

今回6月からの出張時、一足先に保健省、UNFPA(国連人口基金)、ムジンバ県保健局の人たちに完成した動画を見てもらいました。「いつ動画を公開するのか?」「自分もこの動画がほしい」「作ってみたい」など、高評価をいただきました。



クリームシチューの現地語 Ver

事務局からの報告

ISAPH インターンへのインタビュー

長崎大学大学院 熱帯医学・グローバルヘルス研究科 国際健康開発コース

Suong Davy

ISAPHで働く皆さんから全面的に支援していただき、無事にインターンとしての役目を果たすことができたことに感謝し、感動しています。2カ月間の活動を通じて、この組織の構造・ビジョン・主要な活動を理解することができました。また、母子保健に関するプロジェクトマネジメントを、実際のプロジェクトから学ぶことができたのも大きな成果でした。

インターン期間中の活動で新たなスキルや経験を得たことは、今後の業務にも積極的に活用・応用していきたいと考えています。カンボジアの保健機関、特に母子保健サービスの向上に、この度の経験で得た知識と技術が貢献できると確信しています。短い間ではありましたが、本当にありがとうございました。



Sambath Sreyleak

ISAPHのプロジェクト戦略はよく練られており、活動が目標とする指標をどう改善していくのかがよく分かります。しかし、交通事情や信仰の問題、資格を持った保健スタッフや保健施設の少なさなども影響し、プロジェクト終了時にすべての問題が解決しているわけではないことも知りました。国際NGOとしてのプロジェクトは、現地の保健省を通じた地方政府の関与、そして地域住民の参加なしには、その目標を十分に達成することはできません。

このような事実を真摯に捉え、ISAPHが力強く成長と発展を目指していることに、非常に刺激を受けました。ISAPHがこれからも成長して、カンボジアを含むより多くの国にプロジェクトを届けられることを心から祈念しています。



担当者よりコメント

インターン、お疲れさまでした！ 楽しく意義のあるセッションができ、こちらでも学びの多い期間でした。

最後に、一緒に食べたカンボジア料理、酸味の味付けにドライフルーツを使用しており、新たな食文化を知ることができ、美味しく楽しかったです。SuSu! (浜中)

DavyさんとSambathさんが研修目的を達成できたという感想が聞くことができとても嬉しいです。カンボジアとラオスの母子保健・栄養課題は似ているので、両国の取り組みを議論できたことはISAPHにとっても有益な時間でした。今後はお互いの活動地を訪問する等して交流を続けていきたいです。お二人の学業とキャリアの成功を心から願っています。(安東)



事務局からの報告

ISAPH福岡事務所の移転と 事務所長就任のお知らせ

ISAPH事務局 山本 作真



2022年4月、これまで福岡市東区にあったISAPH福岡事務所は、福岡県久留米市へ移転いたしました。新住所は下記の通りとなります。

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422番地
聖マリア病院 国際事業部内
特定非営利活動法人ISAPH福岡事務所
TEL: 092-621-8611 (移転前から変更ありません)

久留米市はISAPHの設立母体である“社会医療法人雪の聖母会”が設立された土地であり、同じ聖マリアグループに属する聖マリア病院、聖マリアヘルスケアセンター、聖マリア学院などの所在地となります。

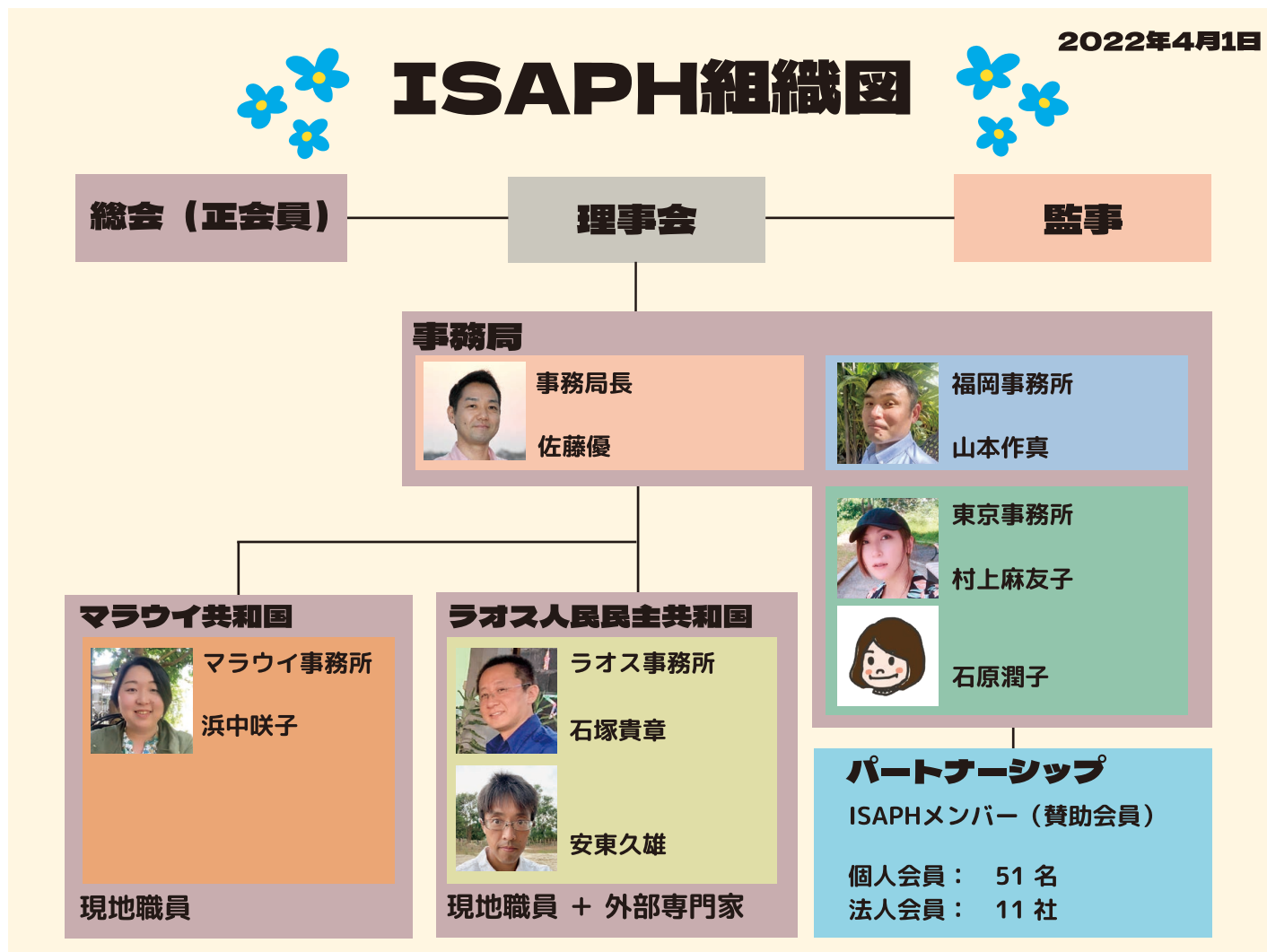
今後はISAPHも、久留米市や周辺地域の市民・団体の皆様と、より緊密な関係を構築する機会を増やしてゆければと思います。

また、事務所移転と併せて、昨年末までマラウイ事務所に赴任していた山本が、福岡事務所長として着任いたしました。東京事務所と共に、ISAPHの国内業務を担当いたします。

これまでは在外勤務ということで対象国に密着した活動を行って参りましたが、今後は両国間の行き来も継続しつつ、久留米市を拠点にして業務にあたります。活動してきた国の人々や彼らの暮らしを皆様により知っていただく機会を作るなど、これまでの経験を国内に還元するような取り組みができたらと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



聖マリア病院と山本職員



ラオスとマラウイ、こんなに違うの!? ～村の平均的な家～

ラオス

ラオスの農村部では、木造の高床式住居が一般的です。雨季の洪水による床上浸水やネズミの侵入を避ける役割だけでなく、普段は床下を農機具の保管や養鶏、伝統服シンの機織りなどに活用しています。住人が外出する時は階下から居住スペースに上がるための梯子を取り外します。そうしないと鶏や山羊などの家畜が上がってきて、大事な食糧が食べられたり、糞で汚されたりしてしまうからです。



マラウイ

マラウイの農村部では、レンガ造りの家が主流です。今回は、ISAPH マラウイ事務所のビリマ職員宅の写真を撮りました。レンガ造りの家の屋根はトタンか藁でできています。トタン屋根の家は、雨季に雨が降ると家の中で話し声が聞こえないくらいの騒音がします。レンガは、ただ天日干しにしたものと、素焼きしたものがあり、家づくりでは後者がよく使われているようです。レンガ造りは、夏でも涼しく感じます。



決算報告

2021 年度収支決算報告

項 目	金 額	内 容
前年度繰越金	12,228,672	
収 入	15,826,036	
収入内訳	747,492 1,179,713 5,529,000 7,880,200 489,631	会費 寄付金 助成金・補助金 事業収益（業務委託等） その他
支 出	11,657,582	
支出内訳	10,301,018 83,338 271,552 858,661 143,013	ラオスプロジェクト マラウイプロジェクト 国内事業 管理部門 その他（雑費・法人税等）
収支差	4,168,454	
2021 年度末期預金額	16,397,126	

2022 年度予算

項 目	金 額	内 容
前年度繰越金	16,397,126	
収 入	9,950,000	
収入内訳	700,000 250,000 3,000,000 6,000,000	会費 寄付金 助成金・補助金 事業収益（業務委託等）
支 出	12,100,000	
支出内訳	9,000,000 1,500,000 300,000 1,000,000 300,000	ラオスプロジェクト マラウイプロジェクト 国内事業 管理部門 その他（雑費・法人税等）
収支差	△ 2,150,000	
2019 年度末期残高	14,247,126	

最近のできごと

2022年2月～5月

- 2月19日** 【マラウイ】
浜中職員が、関西国際保健勉強会でマラウイ事務所の活動について発表
- 3月～4月** Suong Davy氏、Sambath Sreyleak氏をインターンとして受け入れ
- 3月5日** 日本国際保健医療学会第40回西日本地方会に参加
- 4月1日** ISAPH福岡事務所を久留米市の聖マリア病院国際事業部内に移転、山本職員が福岡事務所所長に就任
- 5月19日** トークイベント『おしえてISAPH! ～もっと知りたい国際協力のコト～』をYouTubeライブにて実施



編集後記

前号より表紙デザインを一新して、新たな装いとなったISAPHニュースレター。昨年からスタッフ全員の意見を反映させて作るようになりました。第42号の新たな取り組みは、「中の人をもっと見せていこう」という趣旨で、執筆者の横に顔がわかる写真やイラストを添えることに。私たちISAPHの活動やスタッフを、もっともっと身近に感じていただけるよう、これからも進化していきますので、皆様からのご意見やご要望をお待ちしています。また、ISAPHの活動をもっと知りたい！ 応援したい！ という方には、賛助会員（法人・個人）への入会や銀行振込・クレジットカードでの寄付もご案内しております。どうぞお気軽に事務局までお問い合わせください。（石原）



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

法人・一般どちらでもオンラインサロンに参加できます。

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

—— 特定非営利活動法人ISAPH ——

【福岡事務所】

〒830-8543

福岡県久留米市津福本町422番地 聖マリア病院 国際事業部内
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004

東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <https://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理 事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理 事	渡部 和男	元特命全権大使
監 事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPHニュースレター 第42号 編集スタッフ】

佐藤 優／石原 潤子

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：谷口 雅彦

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設

- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設
(一般病院2 〈3rdG: Ver.1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。